

東海 の 古 代

第202号 2017年6月

会長 : 竹内 強

副会長・発行 : 林 伸禧

編集 : 石田敬一

投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

HP : http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

持統天皇の行幸

一宮市 畑田寿一

持統天皇（第41代）は、天武天皇の皇后であったものの天武天皇の死去にあたり草壁皇子と共に政務を執ってきた。

しかし、草壁皇子の死去により孫の軽皇子が成長するまでの繋ぎとして689年に天皇に即位し、即位中は高市皇子を左大臣として共同で政務を行ってきた。当時の朝鮮半島は激動期にあり国内も不安定な政局が続いていた。

持統天皇は他の天皇に比べて在任中の行幸回数が極端に多い。今回は行幸を通して当時の状況を眺めてみたい。

1 吉野宮への行幸

(1) 吉野宮の場所

昭和50年代に入り本格的な発掘調査の結果、吉野郡吉野町宮滝が吉野宮であることがほぼ決定的になった。

調査を指導した奈良芸術短期大学の前園教授の資料によると、この地は縄文時代から遺跡があったが、飛鳥時代に整地を行い、以降7世紀中頃から10世紀初めまで4回に分けて移築が繰り返されてきた。いずれも吉野川が大きく蛇行する場所にあり、平均気温は飛鳥に比べて1～2℃低い程度で、積雪も少なく過ごしやすい場所であった。

(2) 吉野宮への経路

飛鳥の浄御が原から吉野宮に行くには、次の3ルートがある。

ルート	距離	峠の標高
芋が峠経由	19 km	500 m
壺坂峠経由	22 km	350 m
車坂峠経由	28 km	230 m

最も距離が短い芋が峠ルートは急峻で健脚向きであるが、その他は輿でも移動でき、通年利用できた。いずれも京からは1日程度の距離である。しかし、2泊3日で往復する記述も見受けられ、従者は大変な苦勞をしたと思われる。

(3) 吉野宮への行幸の回数

持統天皇の在任中30回以上行幸した。特に冬季にも行幸が行われたことは注目に値する。

行幸年	回数	延滞在日数	冬季回数
持統3年	3	7	1
持統4年	5	15	2
持統5年	4	33	1
持統6年	3	44	0
持統7年	5	33	0
持統8年	1	11	1
持統9年	5	37	1
持統10年	3	24	1
持統11年	1	8	0
計	31	212	6

(戻り日が不明の場合は3日間で計算)

(4) 持統天皇が吉野宮に頻繁に足を運んだ理由

白村江での敗戦（663年）以降、日本は大陸からの侵攻に備え各地に防御の山城を構築してきた。その最後の拠点は和歌山県の大和川流域の高安城で667年に完成している。朝鮮半島からの使者は大宰府政庁で対応し、国書などを持参する使者には天皇が直接対応することが必要になる。しかし、高安城の防御施設を朝鮮半島の関係者に見られることは国防上問題が多い。そのため、使者を紀の川から遡上させ、吉野宮で天皇と接見させていたのではないかと。（持統7年の耽羅王への贈り物などはこれにあたる。）また、大宰府には冬季にも朝鮮半島から使者が来ていた記録もある。

行幸は文武天皇の代になっても続けられ、701年に高安城を廃止し粟田真人が遣唐使として派遣されるまで続いたと思われる。

2 伊勢神宮への行幸

692年（持統6年）、天皇は伊勢神宮への参拝を計画した。参拝に際しては三輪朝臣高市麻呂が2度に亘り中止を進言したが、予定を3日ずらしただけで行幸を決行した。記紀には留守居役の決定と従者への褒賞が書かれている程度で行幸の目的は書かれていない。このため古来から諸説を生んでいるが、今回は国家安泰の立場から行幸の意義を論じてみたい。

崇神天皇代に疫病が流行り京の人口は半減した。これは三種の神器を粗末に扱ったためと信じられており、倭姫が適地を探して巡行の結果、八咫鏡を伊勢の地に安置した。祭神である天照大御神は、五穀豊穰の神であるとともに荒ぶる神としても恐れられており、現在でも我々が参拝する後方に荒魂の神を祀る社がある。古来から、やましい心を持った者が神社に近づくと祟りがあると信じられ、天皇家は未婚の女性を斎王として年3回天皇の名代として参拝させていた。

この言い伝えを逆手に取り、持統天皇は自ら参拝を行い、二心が無い者には祟りが無いこと証明し、臣下に神前で天皇への忠節を誓わせようとしたのではないかと。しかし、この戦略は誰も天皇に続いて参拝しようとせず失敗に終り、以降明治天皇の代になるまで、いずれの天皇も伊勢神宮に参拝しなかった。

3 参河への行幸

(1) 参河行幸の目的

702年、上皇は参河方面の行幸を行った。行幸の目的には諸説があるが、いずれも上皇が老骨に鞭を打って行幸しなければならない理由には説明不足である。目的はただ1つ、自分の死後、孫の文武天皇の政権の安泰を図るためであった。

壬申の乱に続き、文武天皇の没後の時も大津皇子がクーデターを起こそうとしたが、地方豪族の賛同を得られず未遂に終わったことが頭を横切ったのではないかと。2度あることは3度ある。自分の存命中に是が非でも地方の豪族を味方に付けておきたかった。

(2) 行幸の足跡

9月に行宮を設営して、10月には上皇は浜名湖付近まで足を延ばした。その時詠まれた歌の中に「引馬野」（豊川市か浜松市）、「安礼埼（新居）」などの地名が見られる。

その後、今回の主目的である参河の豪族との対談に臨んだ。当時の参河の状況を俯瞰すると、錬鉄（軟鉄）の原料である高師小僧を産し、渥美半島の城下海岸からは砂鉄が採れた。鍛冶の神様を祀る「金山神社」は現在の豊川市、額田郡に散在し、鉄産業が盛んであったことが伺われる。さらに南信州地域には牧場もあった。「穂の国造」、「参河の国造」はいずれも物部系であり、この状況は壬申の乱のときの美濃国の状況に極似しており、侮れない勢力であった。

参河の豪族は前年この地方を襲った「蝗の害」、「風水害」に対して上皇が適切な支援をしてくれたことに感謝しており、協力要請を素直に受け入れたと思われる。

その後、尾張、美濃、伊勢、伊賀の壬申の乱に活躍した豪族を廻り、11月に帰京した。特記すべきは不破の関にいる宮勝木実を地方豪族最高位に昇格させた点であろう。「参河勢が立ち上がった場合は協力して関所を通せ」と依頼したのではなかろうか。

帰京の1か月後の12月に上皇は崩御された。波乱万丈の人生を送る中で、最後まで日本の国の安泰を祈念した天皇であった。

九州古代史探訪旅行 その7

安城市 山田 裕

7. 「日隅宮」福岡県朝倉郡弥永に所在

日隅宮は、地図上及び現地も「大己貴神社」である。太宰府地名研究会のトレッキングで2016年の6月と8月の二度訪問した。

大己貴神社の由緒には、次のようにある。

弥永字日隅宮にあった祠をこの地に遷し、天神社と合祀する。当時の碑に「本宮はもとウズノミヤの鎮座であったが、嘉永年間一八四八～一八五三年に字古寺に遷してから八十余年を経過したが、今ここに合併する。昭和三年一九二八年卯辰三月当区中「日隅宮」と刻してある。日本書紀に「高皇産靈尊が大己貴命に……汝が引退後住むところに天日隅宮を造ってあげよう……」という条がある。

附記 田神社の田が、いつしか天と訛ったと思われる。祭神は農業の神である 埴安命 である。

古川清久氏の説明では、「田神社」のご祭神「田神様（タノカンサーとも呼ばれる）」について、「故百嶋由一郎氏は、大幡主（亦の名埴安彦命）と大山祇神の二神による擬神体を成していた。」と述べられている。

同社の立地状況は南に筑後平野を望む地であるが、集落と隔絶した地であり、大己貴神が幽閉された雰囲気漂わせている。この雰囲気は『紀』が記す「日隅宮」を想起させる。故百嶋氏は大己貴（＝大国主）を九州王朝の親衛隊長と述べている。日隅宮に幽閉された理由は不明だが、九州王朝によって肅清されたと考えられる。

8. 継体天皇の墓陵

内倉尚久氏のブログで、朝倉市長田に所在する「長田大塚古墳」が継体天皇の墓陵として紹介されている。同古墳は直径80m、高さ30m、日本列島中最大級の円墳である。同ブログには「井上悦文氏（著書に『草書体で解く邪馬台国の謎―書道家

が読む魏志倭人伝―』)によれば、近くを通る大分自動車道山田SAの予定地が、この古墳にかかっていた。所有者はこれで畑が売れると思い喜んでた。ところが、“宮内庁が大事な古墳だから壊してはいけない”と横やりを入れてきた。その結果、自動車道は北のほうに急カーブし、路線変更となり畑は売れなくなったという。」と説明されている。ところが、現在まで同古墳は宮内庁による天皇陵墓治定、陵墓参考地指定の扱いを受けていない。

古川清久氏の車に同乗し、同古墳を訪れた。麓部分には、墓地と柿の木畑がある。傾斜が鋭く、ただ見上げるばかりである。確かに大きな円墳であることは間違いない。その後、古川氏と継体天皇ゆかりの地名「三島・福井・藍」地区を訪れたが、方向感覚に鈍いせい、よく理解できなかった。

太宰府地名研究会の例会であるトレッキングに参加して、朝倉市杷木池田所在の「杷木神社」を訪れた。案内役は古川氏である。

案内板には「第26代継体天皇の御代、筑紫の豪族磐井が反乱を起こした時に、朝廷では鹿鹿火大連に命じて討伐を命じたが、磐井が余りに強力なため、苦戦に陥ったとき、この神社の前に幣帛を捧げ祈願してからは、草木のなびくが如くに平定することが出来た。」と記されている。前述したように、私の推論は「雄大迹天皇（『紀』は男大迹天皇と記す）軍は筑後川左岸に陣営、磐井軍は同右岸に陣営し、御井郡で交戦し、勝利したのは筑後川左岸の雄大迹天皇軍」である。

「継体天皇陵とされる長田大塚古墳」並びに「杷木神社」は筑後川右岸（川の北側）に立地している。この事実は「磐井の乱」に勝利し、占領地を高らかに宣言した所産かもしれない。

9. 大率・姫氏

紀元前から古代九州へ渡ってきた民族の経路は、「稲の伝播」とほぼ一致する。すなわち、中国大陸と朝鮮半島経由である。その結果、多くの言語が飛び交い、習慣や信仰も壁となって混乱した時代があったと思われる。この混乱をまとめていったリーダーなくして古代九州並びに日本列島はまとまらなかったと考えられる。

故百嶋氏は、日本列島を統治していたのは漢民

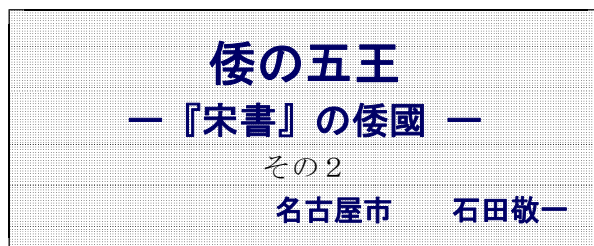
族の大率・姫氏で糸島・前原に居住し、日本列島をまとめるため全国各地を御巡行（東遷ではない）された。大率を守っていたのはイスラエル系の統領「金山彦（瀛氏：秦の移民でヘブライ系）」で、言語は漢語を媒介としてまとめたのが八俣大蛇と述べられている。

信憑性はともかく、同氏が“神社考古学”研究に60年費やした労力は「敬意」に値するであろう。現在、“神社考古学”の検証に全国を飛び回っている古川氏の健闘を祈りたい。

おわりに

今回の旅行は、多くの人に助けられたからこそ、達成できたと心から思っている。妻に言わせれば「自立心に乏しい」私が、食料買い出し、炊事、洗濯をこなし、せっせといくつかの古代史研究会の例会に参加し、久留米市民大学講座にも三回参加し、古代史の知見を深めることが出来た。

行政では福岡県教育庁総務部の赤司善彦氏をはじめとして各自治体の埋蔵文化財センター及び九州資料館の方々、小郡市観光協会の方々、大宰府・久留米地名研究会の方々、個人では古川清久氏、中島茂氏、伊藤正子氏、永井正範氏、学者では筑紫古代文化研究会の主催者奥野正男氏、久留米大学大学院比較文化研究所科長大矢野栄治教授（実は妻のまた従兄）氏等から本当に親切な教唆・指導をいただいたことに、改めて謝意を表したい。



前回は、**第十四代仲哀**について、九州の天皇である可能性を探りました。

書紀編者は、仲哀の御陵である河内恵賀長江（書紀では「河内国長野陵」）は、近畿にあるという立場で記述していますから、学会においても、書紀の思想に立って、河内恵賀長江は大阪府藤井寺市の岡ミサンザイ古墳（恵我長野西陵）としています。

4 第十五代応神天皇

次に、実在性がほぼ確実といわれる**第15代応神天皇**は、神功皇后紀に「**生譽田天皇於筑紫。故時人號其産處曰宇瀨也**」とあって、筑紫の宇瀨で生まれたとされます。応神紀には、「**冬十二月、生於筑紫之蚊田**」とあり筑紫の蚊田が出生地とされ、記紀ともに筑紫が誕生地であると記します。

「蚊田」については諸説がありますが、宇美八幡宮（福岡県糟屋郡宇美町宇美1丁目）には、そのとき、産湯に使った井戸とされる「産湯の水」等が残っており、この古い地名が蚊田かたであったとされ「蚊田の森」と名付けられています。

また、筑前国怡土郡長野村蚊田（糸島市長野）で生まれたとされる説もあります。

長野の西に隣接して宇美八幡宮（現・福岡県糸島市川付）があり、古名を長野八幡宮といいます。上宮は仲哀天皇埋葬の地で祭神は仲哀天皇であり、本宮は応神天皇、神功皇后、玉依姫尊、瓊瓊杵尊、気比大神、菅原大神を祭神とします。仁徳の時代に気比大神（天日鉾尊）を祀らせたのが本宮の起源とされ、『古事記』には、気比大神と応神天皇との名前交換が行われたとあります。

このほかの候補地として、大分八幡宮（福岡県飯塚市大分）があります。宇佐八幡宮（大分県宇佐市）の本宮で、かつまた箱崎八幡宮の元宮であるとされ、この境内にも応神天皇の産湯の井戸があります。なお、この大分八幡宮の神殿裏山は、皇室古墳埋蔵推定地「仲哀天皇御陵」になっています。

いろいろな説がありますが、応神は八幡宮と大いに関係があり、「宇瀨」「蚊田」のいずれにしても「筑紫」の内にあることに変わりはありませんから、応神は筑紫生まれであることに間違いはないでしょう。そもそも応神は、神功皇后が三韓征伐で朝鮮半島から帰ってすぐに生んだのですから、筑紫で生まれたとするのが妥当です。

また、**応神陵**は、通説では、大阪府羽曳野市菅田にある菅田山古墳こんだやまこふんに比定されます。通説に従えば、九州で生まれた応神は大和で埋葬されたことになります。生まれ故郷から遠く離れた場所に御陵を設けるというのは感覚的に合わないように思いますが、もし、大和での埋葬が正しいとすると、神功皇后と武内宿禰の時期に九州から大和に移つ

ところで、仲哀天皇の急死の説話には、神功皇后と武内宿禰が絡んでいることは確かでしょう。急死した仲哀天皇の子である応神を神功皇后が宿したにもかかわらず、生まれないように腰に石をあてて三韓征伐を行ったという話は、あくまで出産時期の調整のいいわけにすぎません。仲哀の急死の時期から数えれば、応神の父が仲哀ではないことが明白になってしまうので、“取石挿腰”の伝説で時間的に辻褄を合わせたということだと思います。

第十四代仲哀と第十五代応神は、これまで示してきたとおり、九州を本拠地にした九州王朝の天皇と考えると良さそうです。少なくとも近畿大和の天皇とするのと同程度あるいはそれ以上に可能性があると考えます。

『会津正統記』と古代逸年号

瀬戸市 林 伸禧

はじめに

『会津正統記』に古代逸年号が記述されているが、内一部校訂されているので、それらの状況を報告する。なお、この古代逸年号を発見したのは、斎藤隆一氏であり「東北にも九州年号があった〈その2・会津編〉」『市民の古代研究』26号、1988年3月で発表されている。(別紙1参照)

また、『会津正統記』は、『北鑑』で述べている倭国年号(第Ⅱ系年号)を立証する文献であることが判明したのでその状況を報告する。^{*1}

1 経緯

(1) 斎藤隆一氏は、九州年号の探索する中、福島県会津若松市立会津図書館で発見され、「東北にも九州年号があった〈その2・会津編〉」の解説で、次のとおり示されている。

尚、④⑦⑪⑫の()^{*2}内は、原文に紙を貼り改訂してある文である。(私注・白鳳の持統は誤りであろう)

改訂理由として「朱鳥は一年にして二年は持統と改元。十一年は文武四年康子に当たり翌年改元大宝となれり」とある(傍点は私)。

原文は原資料をそのまま転載したものと思われるが、写筆者が自分の知識で「校正」したもので、しかし、幸いなことに原文が薄くにじんで見えるのが救いであった。校正しても、原文を抹消すべきでないのは言うまでもないが、奈良時代末期に淡海三船により作られたとされる天皇の漢風諡号である持統を元号とし、堂々と校正しているのを見る時、原文改訂の恐さを見せつけられる思いがするのである。

(『市民の古代研究・合本』第一巻、170頁、
下線は林による。別紙2・3参照)

(2) 内容を承知するため、紙貼前の『会津正統記』及び、紙貼後の『会津正統記』を書写した複写物を会津図書館からとりよせた。

2 古代逸年号の記述及び校訂状況

その状況は、表1の『会津正統記』貼紙前後対比表のとおりである。そして、これを古代逸年号別に、表2『会津正統記』古代逸年号年表に整理した。これらから次のように推察する。

(1) 紙貼者

- ・朱鳥年号について、紙貼者は、頭注で述べているように『日本書紀』で掲載されている天武15年の朱鳥元年のみしか承知してなかったもので、それにより校訂した。
- ・ただし、朱鳥8年癸巳(表1の⑬・⑭の2箇所)は紙貼されていない。これは紙貼者が失念したと思われる。
- ・白雉9年戊午について、紙貼者は、表1の①のとおり齊明紀の白雉9年を齊明4年と校訂しているが、表1の⑯のとおり齊明紀と記述していない場合には校訂していない。
- ・それ以外の古代逸年号については、そのまま校訂していない。

(2) 紙貼後の書写者

- ・表1の⑭のとおり、巻三・修験道系譜「(五世壽元行者)での「朱鳥八年癸巳」を「持統七年癸巳」と校訂している。

*1 倭国年号：拙著『北鑑』倭国年号(『東海の古代』201号、平成29年5月号)参照

*2 ④～⑫()：斎藤氏が確認した文献番号及び校訂後の年号。別紙『会津正統記』紙貼による校訂状況参照

3 考察

(1) 紙貼者

- 『日本書紀』で掲載されている古代逸年号のみしか承知していなかったと思われる。
それ故に、表1の⑬「白雉九年戊午」及び⑭「朱鳥8年癸巳」を除き『日本書紀』掲載年号以外の①「白雉9年」及び「朱鳥2年以上」の朱鳥年号について、すべて校訂している。
- 「善記・蔵和・曾要・命長・白鳳」年号については、当否を述べる知識を有していなかったもので、そのままとして校訂しなかったと思われる。
- 表1の⑯の白鳳17年丁丑〈「持統2年丁亥」に校訂〉、表1の⑰の白鳳21年辛巳〈「持統6年壬辰」に校訂〉は、なぜ干支も含めて校訂したのか、理由及び根拠が不明である。

(2) 紙貼後の書写者

- 紙貼後の書写者は、紙貼による校訂を尊重してそのまま書写を行った。
- 紙貼後の書写者は、紙貼者の校訂に見落としがあったと考えられる⑯の十六世智静僧正の「朱鳥八年癸巳」については校訂したが、⑰の二世義学行者条「朱鳥八年癸巳」は校訂しなかった。一方を校訂し、他方を校訂しなかった理由は不明である。
見落としであろうと推測する。

(3) 筆者の見解

- 古代逸年号には、様々なタイプが存在していることを理解しておれば、紙貼者は校訂する必要が無かったと思われる。
- 『会津正統記』は、第Ⅰ系年号と第Ⅱ系年号の混合型である。
拙著『『北鑑』倭国年号^{*1}』（『東海の古代』201号、平成29年5月）で述べたように、このような年号群があることを承知していれば校訂する必要がなかったと思われる。
当然ながら、斎藤隆一氏も承知していない。

4 その他

(1) 斎藤論考について

- 斎藤氏が閲覧したとされる、古文書『会津正統紀 抜書』における『田島薬師寺縁起』では「白鳳六年戊寅」は確認出来なかった。

ただし、会津御蔵入資料叢書第三集の伊南芳通著『会津正統記』第一巻〈活字本〉には、次のとおり記述されており、「白鳳六年戊寅」が記載されている。

なお、「白鳳六年戊寅」は、第Ⅱ系年号である。もし、第Ⅰ系年号であれば「白鳳十八年戊寅」である。

七五 田島薬師寺

人皇八十五代後堀河天皇安貞二年戊子。

会津郡長江荘田島邑に金光山薬師寺を鎮聖建立。……

然るに白鳳六年戊寅天竺国興照菩薩日本に尊来あつて諸仏を刻み玉う。

(伊南芳通著『会津正統記』第一巻、18頁)

- 細字で記載されている「蔵和元年、善記二年」を記述していない。
- 三巻の本朝之大祖「二世義学行者」条の「白雉九年戊午・朱鳥八年癸巳」も記述していない。
- 誤記については次のとおりである、
「一卷末」に、朱鳥八年癸巳より元禄元年庚午まで二百七十八年に成るなり
とあるは、正しくは「三巻、本朝之太祖」の「十六世智静僧正」条、
朱鳥八年癸巳より天禄元年庚午まで二百七十八年に成るなり
であり、「一卷末の元禄」については、「三巻の天禄」の誤りである。

(2) 『会津正統紀 抜書』の修験道本山系図

『会津正統紀 抜書』の修験道本山系図については異説がある。筆者の承知している文献と比較すると、表3の「本山家傳統系譜対比表」のとおりである。

^{*1} 倭国年号 : 新たに発見された第Ⅱ系年号のひとつの型。簾中抄と異なるところは、孝徳紀から文武紀大宝まで継続して「大化・白雉・白鳳・朱鳥」年号で記述されていることである。すなわち、大化をから年号が始まり「大化5年、白雉22年、白鳳14年、朱鳥15年」で大宝に続くとしている。

表 1

『会津正統記』貼紙前後対比表

目 次		貼紙以前	貼紙校訂・貼紙後書写	番号	備 考
卷一	金塔山惠隆寺縁起	斉明天皇 白雉九年戊午	斉明四年戊午	①	
		欽明天皇即位 十九年己卯 年号藏和元年云也	同左	②	正しくは 欽明20年己卯
	飯豊山開基縁起	孝徳天皇 白雉三年壬子	同左	③	
	金剛山如法寺並 鳥逐観音縁起 外 赤城大明神縁起	天智御宇 白鳳八年戊辰	同左	④	
		白鳳十六年丙子	同左	⑤	
		白鳳十八年戊寅	同左	⑥	
		継体天皇即位七年 善記二年 癸卯	同左	⑦	正しくは 継体17年癸卯
卷三	龍蔵寺并 薬師如来縁起	天武天皇 白鳳十四年甲戌	同左	⑧	
		白鳳十八年戊寅	同左	⑨	
	法光院地藏菩薩縁起	白鳳十年庚午 御誕生 八年戊辰四月八日イ	白鳳十年庚午御誕生	⑩	異説削除
	(第一祖役行者)	三歳時 曾要二年丙申	同左	⑪	
	修験道八祖並 役行者小角開基 聖護院宮門跡御 系図 附 醍醐松橋三 寶院門跡	七歳時 命長元年庚子	同左	⑫	
		孝徳天皇 白雉三年壬子 小角十九歳	同左	⑬	
		持統天皇御宇 朱鳥四年己丑	持統三年己丑	⑭	
		文武天皇 同十五年	同四年庚子	⑮	
		同十六年辛丑 改元有大宝	右翌年	⑯	
		白雉九年戊午 生	同左	⑰	校訂忘れか？
	(二世義學行者)	持統天皇御宇 朱鳥八年癸巳 入峰	同左	⑱	校訂忘れか？
	(三世義玄行者)	白鳳八年戊辰 生	同左	⑲	
	(四世義真行者)	白鳳二十三年壬午 生	同左	⑳	正しくは白鳳 二十二年壬午
	(五世壽元行者)	朱鳥十五年庚子 生	文武四年庚子	㉑	
	(十六世智静僧正)	朱鳥八年癸巳	持統七年癸巳	㉒	書写者校訂
	雑記	孝徳天皇即位元年乙巳…大化元年	同左	㉓	
		白雉二年辛亥	同左	㉔	
		天智天皇 白鳳六年丙寅	同左	㉕	
		同十四年甲戌	同左	㉖	
		同十七年丁丑 (※677)	持統二年丁亥 (※687)	㉗	
		同二十一年辛巳 (※681)	持統六年壬辰 (※692)	㉘	
		持統天皇 朱鳥七年壬辰	持統六年壬辰	㉙	

※1 朱鳥年号については、頭注で、「朱鳥は一ケ年ニシテ二年ハ持統ト改元 十五ケ年ハ文武四年庚子ニ当リ翌年改元大宝トナレリ」と記述して校訂している。

2 「白雉九年戊午・朱鳥八年癸巳」が2件記述されているが、各々1件のみ校訂している。

3 詳細は画像「『会津正統記』紙貼る校訂状況」参照

表 2

『会津正統記』 古代逸年号年表

西 暦		天皇・治世		会津正統記			類型区分				校 訂		
年数	干支			古 代 逸 年 号	年数	干支	第Ⅰ系		第Ⅱ系				
							二中歴型		倭国年号型				
5 2 3	癸卯	継体	1 7	善記	2	癸卯	2	癸卯			※原文：継体 7 年		
5 5 9	己卯	欽明	2 0	蔵和	1	己卯	1	己卯			※原文：欽明 1 9 年己卯		
6 3 6	丙申	舒明	8	曾要	2	丙申	2	丙申			※『二中歴』では「僧要」		
6 4 0	庚子		1 2	命長	1	庚子	1	庚子					
6 4 5	乙巳	孝徳	1	大化	1	乙巳			1	乙巳	※校訂者は、『日本書紀』年号と一致するので校訂しなかった。 『日本書紀』の範囲外では校訂した。		
6 5 1	辛亥		7	白雉	2	辛亥			2	辛亥			
6 5 2	壬子		8		3	壬子			3	壬子			
6 5 8	戊午	斉明	4		9	戊午			9	戊午	斉明四年(※ 2 個、内 1 個未校訂)		
6 6 6	丙寅	天智	5	白鳳	6	丙寅	6	丙寅			※白鳳元年＝齊明七年辛酉		
6 6 8	戊辰		7		8	戊辰	8	戊辰					
6 7 0	庚午		9		1 0	庚午	1 0	庚午					
6 7 4	甲戌	天武	3		1 4	甲戌	1 4	甲戌					
6 7 6	丙子		5		1 6	丙子	1 6	丙子					
6 7 7	丁丑		6		1 7	丁丑	1 7	丁丑			持統二年丁亥(※校訂理由不明)		
6 7 8	戊寅		7		1 8	戊寅	1 8	戊寅					
6 8 1	辛巳		1 0		2 1	辛巳	2 1	辛巳			持統六年壬辰(※校訂理由不明)		
6 8 2	壬午		1 1		2 3	壬午	2 2	壬午			※原文は「白鳳 2 3 年壬午」であるが、年令計算からは「白鳳 2 2 年壬午」である。		
6 8 3	癸未		1 2										
6 8 9	己丑	持統	3		朱鳥	4	己丑			4	己丑	持統三年	
6 9 2	壬辰		6			7	壬辰			7	壬辰	持統六年	
6 9 3	癸巳		7			8	癸巳			8	癸巳	持統七年(※ 2 個、内 1 個未校訂)	
4 0 0	庚子	文武	4			1 5	庚子			1 5	庚子	文武四年庚子(※ 2 個校訂)	
7 0 1	辛丑		5		1 6	辛丑			1 6	辛丑	右翌年改元		
				大宝	1								

※ 1 朱鳥年号：頭注で、「朱鳥は一ケ年ニシテ二年ハ持統ト改元。十五ケ年ハ文武四年庚子ニ当リ翌年改元大宝トナレリ」と記述して校訂している。

2 白雉年号：白雉の通用期間は 5 年間としている。それ以外は校訂した。

3 第Ⅰ系：『二中歴』年代歴で代表される年号群

4 第Ⅱ系：『簾中抄』で代表される年号群で、一つの形して「倭国年号」（『北鑑』30 巻）型。
インターネット「kitakagami.seisaku.bz」参照

表 3

本山家傳統系譜對比表

会津正統記	踏雲録事
第一 法界行者 …… 第八 龍樹菩薩	大日覺王如来 …… 龍樹菩薩
第一祖役行者 號神變大菩薩 人皇三十五代舒明天皇即位六年甲午正月一日卯土 刻産男子男子…… 三歲時 ^{僧聽二年、636年} 曾要二年丙申父喜純死 ※636－634＋1＝3歳 又七歲時 ^{640年} 命長元年庚子母寂時五色免來小角前隨之 入葛城山 ※640－634＋1＝7歳 又人皇三十七代孝徳天皇 ^{652年} 白雉三年壬子 小角十九歳 ※652－634＋1＝19歳 摂津国箕面山登時天八祖龍樹菩薩來臨有驗密秘行之傳授…… 人皇四十一代持統天皇御宇 ^{持統三年、689年} 朱鳥四年己丑 ※689－634＋1＝56歳 依讒言伊豆国大嶋被流自夫…… 去小角慶雲元年 ^{704年} 甲辰七十一箕面山登白雲乘天竺國 飛去云 ※704－634＋1＝71歳 今此山石碑有然大宝二年 ^{702年} 壬寅六十八寂云未詳 ※702－634＋1＝69歳	役行者 舒明天皇六年正月誕生。 十九歳、孝徳天皇 ^{652年} 白雉三年壬子十二月晦日始大峰修行、 是為順峰初、 ※652－634＋1＝19歳 二十歳、 ^{653年} 白雉四癸丑七月十六日入峰。是為逆峰初、 ※653－634＋1＝20歳 持統天皇 ^{丙申、696年} 朱鳥十一年 ^{持統8年朱鳥9年、694年} 六十四歳、暨此年凡逆三十三度修行也、 ※696－634＋1＝63歳、1年ずれる 着角帽子、用九條袈裟、被袈策錫杖、持獨古。 大寶元年 ^{701年} 辛丑六月七日、於摂州箕面山天上獄登天、 ※701－634＋1＝68歳
二世義學行者 俗名日若麻呂孝徳天皇第二宮有間皇子弟也。 天平十九丁亥 ^{747年} 九十寂 ※747－658＋1＝90歳 傳曰 ^{齊明4年、658年} 白雉九年戊午生 持統天皇御宇 ^{持統7年、693年} 朱鳥八年癸巳入峰時三十六歳 ※693－658＋1＝36歳 山城国北白河寺院建立号聖護院宮是宮始也 称御門跡此所改聖護院村	義學 人皇三十八代 ^{659年} 齋明天皇五年己未誕生、 持統天皇 ^{持統8年朱鳥9年、694年} 朱鳥八年甲午 三十六歳、始大峰修行縁起相傳、 ※694－659＋1＝36歳 大和国葛上郡茅原郷新井村新熊野勸請、 着頭中不動袈翠持劔、九十歳入滅、
三世義玄行者 俗名行仁親王天智天皇第五宮 ^{天智7年戊辰、668年} 白鳳八年戊辰 生 和銅五年 ^{712年} 壬子四十五歳入峯 ※712－668＋1＝45歳 天平宝字元年 ^{757年} 丁酉九十歳滅 ※757－668＋1＝90歳	義玄 人皇三十九代 ^{668年} 天智天皇七年戊辰誕生。 元明天皇和銅五年 ^{712年} 壬子四十五歳而、大峰修行縁起相傳、 ※712－668＋1＝45歳 大和國葛上郡石井郷熊野勸請、着寶冠袈裟懸笈、 九十歳入滅、

四世義真行者 俗名田村親王草壁皇子御子 天武11年壬午682年 白鳳二十三年壬午生 (※注2参照。第Ⅰ系年号) 726年 神龜三年丙寅四十五歳入峯 ※726－682＋1＝45歳 751年 天平勝宝三年辛卯七十歳減 ※751－682＋1＝70歳	義真 天武11年壬午、682年 人皇四十代天武天皇 白鳳十一年 誕生、 (※第Ⅱ系年号) 726年 四十五代聖武皇帝神龜三年丙寅四十五歳、 大峰修行縁起相、 ※726－682＋1＝45歳 傳、摂津國熊野勸請、着寶冠持珠敷披袈裟、七十歳入滅、
五世壽元行者 俗新田部親王天武天皇五男也 文武4年、700年 朱鳥十五年庚子生 (※第Ⅱ系年号) 734年 天平六年甲戌三十五歳入峯 ※734－700＋1＝35歳 ※734－700＋1＝35歳 798年 延暦十七年戊寅九十九歳減 ※798－700＋1＝99歳	壽元 700年 四十二代文武天皇四年庚子誕生、 734年 四十五代聖武天皇天平六年甲戌三十五歳、 大峰修行縁起相 ※734－700＋1＝35歳 傳、豊前國彦山開基、同所熊野権現勸請、着角帽子持索被袈裟、九十九歳入滅、
— 中略 —	— 中略 —
十六世智静僧正 …… 持統7年、693年 以上是迄以皇孫十五代統故是日官家朱鳥八年癸巳 970年 天禄元年庚午迄二百七十八年也 是皆官家云也 ※970－693＋1＝278年	智静 ※左記文記述なし

※1 踏雲録事：行智が醍醐三寶院門跡からの下命により天保7年（1836）丙申十一月献上された書。

『続々群書類従』第十二、300～302頁

『増補改訂 日本大藏經』9 5巻、394～396頁

2 会津正統紀

- ① 「**今此山石碑有然大宝二年壬寅六十八寂云未詳**」(702年702－634＋1＝69歳)から、大宝元年(6 8歳)又は6 9歳のいずれかである。
- ② 四世義真行者の「**白鳳二十三年壬午**」は、白鳳2 3年癸未(天武1 2年、6 8 2年)、又は白鳳2 2年壬午(天武1 1年、6 8 2年)のいずれかであるが、年令計算から「白鳳二十二年壬午」である。

3 踏雲録事

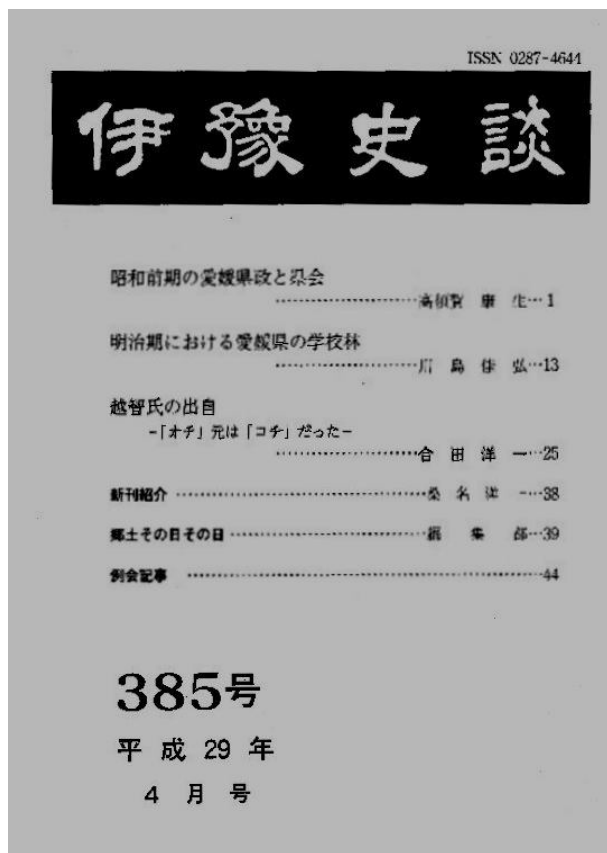
- ① 役行者の「**持統天皇朱鳥十一年六十四歳**」は第Ⅱ系年号で「持統1 0年朱鳥1 1年丙申(6 9 6年)」であるが、年令計算すると「6 9 6－6 3 4＋1＝6 3歳」となり1年ずれる。整合を保つためには「持統1 1年朱鳥1 2年丁酉(6 9 7年)」と解釈する必要がある。
- ② 義學での年数は「会津正統紀」と比較して、後に1年ずれている。
- ③ 義眞の「**白鳳十一年**」は、年令計算から白鳳十一年壬午(天武1 1年、6 8 2年)である。

なお、同一記事内容であるのに年号が異なるのは、『会津正統紀』の「白鳳二十二年壬午」は第Ⅰ系年号であり、『踏雲録事』の「白鳳十一年壬午」は第Ⅱ系年号であるためである。

ひろば 文献図書の寄贈

前回の例会にて本会の山田裕氏から『薬師寺の向こう側』(室伏志畔著、響文社、2015年)の寄贈がありました。

また、本年5月に古田史学の会・四国の合田洋一さんから、「伊予史談」385号の寄贈がありました。この中に合田さんの『越智氏の出自ー「オチ」元は「コチ」だったー』の論考が所蔵されています。ご希望の方にお貸しします。



前回の例会の内容

■ 九州古代史探訪旅行 その6

安城市 山田 裕

上岩田遺跡の建物群について、飛鳥宮や飛鳥浄御原宮に比定する論考が発表されているが「評衡」である可能性が濃厚である。

■ 『北鑑』倭国年号

瀬戸市 林 伸禧

『北鑑』に掲載されている倭国年号について、関連文献を精査した。

■ 『新唐書』を読み直す

一宮市 畑田寿一

『新唐書』の記述が正しいものとして、神武天皇建国時期、天皇の漢風諡名、多利思北孤などについて私見を述べた。

■ 倭の五王 その1

名古屋市 石田敬一

倭の五王に関連して、記紀に記される天皇は、九州王朝の天皇であるという視点に欠けていたことを踏まえ、倭の五王の前段として、仲哀天皇が九州王朝の天皇である可能性を検証した。

例会の予定など

■ 今月の例会

- (1) 日時 6月4日(日) 13:30~17:00
- (2) 場所
名古屋市市政資料館 第1集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- (3) 参加料 500円 (会員は不要)
- (4) 交通機関
 - ・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
 - ・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
 - ・市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
 - ・市バス「清水口」、南西徒歩8分
 - ・市バス「市役所」、東徒歩8分
- (5) 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

総会は7月16日の例会の後に行います。

来月以降の例会 7月16日(日)、8月13日(日)

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を25部用意ください。

■ 投稿締切り日 6月30日(金)

- ・ 全て11ポイントでべた打ちしてください。
- ・ インデントは使わないでください。
- ・ 引用文は、これまでの会報誌の例を参考に、出典・頁数を示し正確に文字を転写のこと。

■ 投稿先

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp